隣の乱れ妻
俺がヤリたいW爆乳主婦は超エロかった
基本絵12枚(+立ち絵)
セリフあり差分込96枚

「お夕飯作りすぎちゃったの。一緒にどう？」

俺を食事に誘ったのはマンションの隣に
住む主婦の卯月志桜里さん。
旦那は出張中なのにいつもの癖で2人分の夕飯を作ってしまったらしい。
俺は考えるまでもなく首を縦に振った。
こんな美人の手料理が食べられるなんて嬉しいに決まってる。

立ってるだけで色気を放つ豊満な肉体の人妻。
外見だけじゃなく中身もエロいと俺は知っている。
志桜里さんは旦那さんと愛し合う時に声が抑えられず、
夜になると壁の向こうからよく喘ぎ声が聞こえるんだ。

「あんっ！やぁんっ！あ、あなたのおちんちん奥まで来てるぅッ！」
「いいわぁ！もっとおっぱいも触って！奥を激しく突いてぇッ！」
そんな声を聞いたおかげで俺は何度も股間をシゴくハメになった。

そんな女性が暮らす部屋に俺と二人きり。
俺はいやらしい気持ちと勃起を隠しながら志桜里さんと夕食をとった。

「志桜里さん！？」

「うふふ、食事の最中もココを大きくしてたわよね」

夕飯を終えると彼女はいきなり俺の股間に触れ、
ファスナーから熱く硬くなったモノを引っ張り出した。

「まあ、こんなに長くて太いなんて。想像以上だわ」
「し、志桜里さん、何を・・・」
「何を？んもう、本当はわかってるくせに」

彼女は服を全て脱いで全裸でそこに立って
メロンのような巨乳をぶるんっと曝け出した。

しかもその胸に俺のチンポを挟みこんでゆっくり擦り始める。
俺は夢でも見てるんだろうか？でも、おっぱいの柔らかい感触は本物だ。
「夫が留守だから寂しいの。だから・・・ね？」

上目遣いでそう言われ、俺は全身が震えた。
こんな美人に誘われて断れる男なんていない。
貞操とか不倫とかそんな言葉は吹き飛んで
俺は志桜里さんとセックスすることしか考えられなくなった。
志桜里さんの大きく柔らかいおっぱいによるパイズリで
俺の鈴口からはすぐに我慢汁が湧き出て志桜里さんを汚していく。

「ドクドク溢れてくるわぁ。おちんちんが喜んでるのね？れろぉっ」
「ううっ！」
志桜里さんはパイズリしながら俺の先端を舐めた。
あの綺麗な口が俺のチンポを舐めてくれるなんて。
俺はその快感だけでイってしまいそうだった。

「我慢しないでいいのよ？お口でも胸でもどこでも
おちんちんを入れてびゅーびゅーしていいから」
彼女はそう言って自分の股をまさぐっている。
そこに入れてほしい。そう受け取った俺は彼女に襲い掛かった。

「あんっ！あぅぅっ！す、すごいわ！あなたのオチンチンすごいッ！！」

志桜里さんはベッドの上で裸体を曝け出し、俺に貫かれていた。

夫婦の情事をするはずのベッドで美貌の人妻が股を開き、

夫だけが触れるはずの大きな乳房と卑猥な穴を俺が自由にしていい。

こんな幸福なことが他にあるだろうか。

ぶるんぶるんと揺れるおっぱいを揉みながら志桜里さんの蜜穴を

俺の膨張したチンポが満たし、腰を振ってえぐると信じられない快感がやってきた。

人妻だというのに中は狭く、処女のような圧迫感で俺の陰茎を愛撫している。

「あ、あんっ！あぁぁんっ！
激しいッ！私とこうやってHしたいと思ってたのね？」
「ああ！俺、ずっと志桜里さんとヤリたかったんだ！
志桜里さんを見る度に押し倒して犯してやりたかった！」
卑猥な願望をと告白すると彼女は淫らな雌の顔になった。
「い、いいわっ！好きなだけ揉んで！
スケベな人妻を好きなだけ抱いていいのよッ！」
「ああ！突きまくって中に射精する！
いいよね、志桜里さん！？」

俺は全力でピストン運動を続けながら膣内射精を予告した。
避妊なんて考えはない。この淫らな人妻の奥に精液を注がないと気が済まなかった。
「だ、出して！わ、私の奥にザーメンをちょうだいッッ！」
彼女はあっさりと膣内射精を緩し、俺の欲望を阻むものは何もなくなった。
俺の股間の根元にドロドロに煮え滾った精液が集まり、あっという間に放出された。
「出るぅッ！！」

「んあああああぁぁぁっ！！」
びゅるるるるるっ、びゅくっびゅくっ、どびゅびゅうううっ。
精液が勢いよく放出されるが俺の勃起は少しも治まらない。
射精しながらピストンし、ピストンしながら射精する。
無限に続くんじゃないかと思うほど彼女に精液を注ぎ続けた。

「あんんっ！ま、まだ出てる！奥にビュルビュル出てるわぁっ！」
「どこに何が出てるか言って、志桜里さん！」
俺は少し意地悪になって志桜里さんにいやらしい言葉を言わせた。
「オ、オマンコよ！私のオマンコの奥にあなたのおちんちんが入ってッ！
ザ、ザーメンが出てるッ！射精してわッ！ん、んぅっ、んあああぁぁぁっ！」
美しい人妻の口からオマンコやザーメンという言葉が飛び出る。
俺の興奮は限界を超えてさらなる射精を促していった。

「あふうっ！お、おちんちんしゅごいいいいっ！」
風呂の中で志桜里さんの淫らな声が響いた。
旦那ともシたであろう風呂で今は俺の指が彼女の尻を掴み、
思い切りオマンコをほじって追加のザーメンを吐き出す。
俺達の背徳の関係は４日目に達し、セックスは２０回以上している。
今日も何回射精したかわからず、
志桜里さんの子宮にはもう俺の精液が詰まってる。
「志桜里さん！旦那さんと俺のチンポ、どっちがすごいですか？」
「こ、こっちのおちんちんよ！」
俺は彼女の夫より勝ると言われて優越感を得た。

「チンポって言うんだ！ほら、夫のチンポより気持ちいいって言って！」
俺は志桜里さんの痴態に興奮し続け、さらに卑猥な言葉を言わせる。
「お、夫のチンポより気持ちいいいいッッ！」
彼女は俺の期待に応えて大声で淫語を叫んでくれた。
「ふ、太くて硬いチンポ！このチンポがいいッ！！あ、あんんっ！
私のオマンコ、もうあなたのチンポじゃないとイケないッ！」
「志桜里さんのマンコはもう俺のものだね！」
「そ、そうよッ！んっ、わ、私のマンコはあなたのものよッッ！！」
志桜里さんがそう宣言し、俺の興奮は最高潮に達する。
俺と彼女の性器がぶつかり合い、パンッパンッパンッパンッと激しい音が鳴った。

「あっ、やんっ、だ、駄目っ！そんな！激し、あっ、あああああぁぁっ！」
「志桜里さん！俺、またイクよ！
一緒にイこう！射精されながらイケえええぇぇっ！」
俺の股間でせき止められていたものが解放され、志桜里さんの膣内に押し寄せる。
どくんっ、びゅくくくっ、びゅるるうううううっ、と注がれる熱い精液を感じて
彼女も甲高い嬌声を上げながら絶頂に達した。

「イ、イクぅっ！マンコ、またイっちゃう！イクイクイクぅぅぅぅッッッ！」
志桜里さんの快感に満ちた声は風呂中に響き渡る。
俺は幸せな気分になれたが、その声を聞いていたのは俺だけではなかった。

「あなた達・・・あ、あんな事が許されると思ってるの？」
桐原千帆子。志桜里さんの隣の部屋に住む人妻は
俺の部屋を訪ねると顔を赤くしながら言った。

「最初は知らないふりをしようと思ったけど、もう限界だわ・・・。
他人の妻に手を出した上に・・・あ、あんな卑猥な事を言わせるなんて
恥ずかしいと思わないの！？」
どうやら千帆子さんの部屋にも俺たちのセックスの音が聞こえたらしく、
いやらしい声と音を何度も聞いて気が狂いそうだと彼女は言った。
だが、千帆子さんは口先では怒っているが目の奥には
欲情の火がチロチロと点っているのに俺は気付いた。

「今度あんな事をしたら私にも考えがあるわ。二度としないで。いい？」
「そんな事言って本当は羨ましかったんでしょう？」

「は、はあ！？」
「志桜里さんって喘ぎ声が大きいでしょう？
だから千帆子さんも毎晩ムラムラしたんだ。俺が慰めてあげるよ」
俺はそう言ってドアに鍵をかけ彼女を部屋の奥まで連れてきて
強引に彼女の服をはぎとった。

「きゃあっ！な、何をするの！？」
「千帆子さんのおっぱいもでかいよね。俺、いつも気になってたんだ」
志桜里さんよりも大きい千帆子さんの巨乳、陰毛も濃くてそそられる。
俺の股間はすぐに限界まで膨張した。
硬くなったモノをすぐにズボンから出し彼女の顔の目の前に突き出した。

「ひっ・・・」
千帆子さんはそのサイズに驚いたのか、目を丸くした。
「な、何なのこれ・・・・」
「千帆子さんだって旦那さんのコレをしゃぶったり挟んだりするんだろう？
この大きなおっぱいでさ。俺にもしてほしいなあ」
俺は谷間に勃起したチンポを挟み、両手でその膨らみを揉みながら腰を動かした。

「や、やめなさい！こんな事してタダで済むと・・・や、やめてっ！ん、やぁんっ！」
彼女は逃れようとするが俺に上から圧し掛かられて何もできない。
自慢のおっぱいをぐにぐにと揉まれ、チンポを擦りつけるうちに甘い声が出始めた。
「あ、んんぅっ！こんな！こんな汚いもの！や、やめて！あ、あぅぅぅっ！」
「おっぱいで感じまくってるじゃないか。旦那は揉んでくれないの？」
「そ、そんなこと！か、関係ないでしょ！やめな・・・ん、あぁぁっ」

俺はあれこれと喚く声を無視して乳房を揉み回し、乳首も摘まんでみた。
「あぁんっ！」
彼女はひときわ大きな声で喘いだ。
どうやら乳首が弱いらしく、そこを集中攻撃すると柔い乳首はすぐ硬くなった。
「だ、駄目ッ！そんなとこ、コリコリしないでっ！」

「そんな事言って乳首が勃起してるじゃないか。気持ちいいんだね？」
「き、気持ちいいわけ！んっ！だ、駄目っ！やめて！あ、あああぁぁぁっ！」
おや、体がびくんびくんと震えてるぞ。乳首だけでイったのか。
じゃあ次はオマンコに入れるとどうなるか試してみよう。

「や、やめて！そこは駄目ぇぇぇぇっ！」
やはりオマンコは濡れ濡れになっていた。
おっぱいをいじるだけでここまで濡れてるなら挿入も楽そうだ。
俺はいきり立ったモノを躊躇なく蜜穴にねじ込んだ
「んひいいいいいっ！だ、駄目！入れないで！あ、あうううっ！」
「千帆子さんのココ、すごくキツイよ！全然入れてないんだね！」
彼女は志桜里さんに負けないくらいの名器だった。
しかも俺に挿入されて愛液が洪水のように溢れてくる。

「ぬ、抜いて！そんな汚いもの入れないで！あ、あひゅっ！んあぁぁぁぁぁっ！」
千帆子さんはそう言って俺を拒否するが、愛液で濡れた膣は
俺のチンポをきつく締め付け、射精をねだってくる。
腰を動かすと膣襞が絡みついて極上の快感をもたらし、
この女のオマンコを突きまくることしか考えられなくなった。

「気持ちいいよ、千帆子さんのオマンコ！ずっとオマンコしたい！」
「いやぁッ！そ、そんなにつ、突いたらッ！あ、あひゅっ！ん、や、
あっ、あんんっ！」
腰を振り続けると千帆子さんは徐々にメスの顔になり、
獣のような声を出し始めた。

「な、中はッ！中にらすなんひぇ・・・・」
「絶対に出すッ！千帆子さんの中に！イクよッ！」
問答無用で俺は腰を叩きつけ、千帆子さんの奥めがけて精液を解き放った。
びゅるるるるるうっ！びゅっびゅっ！びゅびゅうううううっ！
チンポが脈打ちながら彼女の中に大量の精液が押し寄せる。

「お、おほっ！おひゅっ！お、おっ、おふううッ！しゅ、しゅごいっ！
こ、こんなにおちんちんでシ、シゴいたらッ！お、おほおおおっ！」
「千帆子さん！そろそろ中に出すよ！」
俺はそう言っておっぱいを掴み、ラストスパートをかけた。

「んあああぁぁぁっ！しぇ、しぇいえひ！ドクドク出てりゅっ！
こんな、こんなの知らないいいいっ！！おふうううううううっ！！」
彼女のオマンコがヒクヒクと震え、ぷしゅっと潮を噴いた。
ビクンビクンと体を震わせてアヘ顔になった千帆子さんは一層淫らだ。
俺は一度射精し終えたが全く萎えておらず、再び腰を動かすと彼女は戸惑っていた。

「あうっ！な、なんでまだ動いて・・・嘘・・・まだ硬い・・・あんんっ！」
「1回だけじゃ治まらないよ！千帆子さん、もう1回シよう！」
「う、嘘でしょ・・・あんっ！あ、あぁあぁぁぁっ！」
それから俺は千帆子さんを何度も絶頂させ、ベッドが愛液と精液でびしょびしょになる頃には彼女は2人の激しいセックスが羨ましかったと認めて自ら腰を振った。

「あふぅんっ！こ、こんなHな恰好をさせるなんてぇっ！」
三日後、俺は千帆子さんの寝室にいた。しかも彼女とセックスしている。
千帆子さんの夫は怪我で入院しており、欲求不満の日が続いていたらしい。
しかも隣では志桜里さんが毎晩セックスで喘ぐのでさらに欲求不満になり、
俺との浮気セックスが始まると性欲と嫉妬で気が狂いそうだったと白状した。

「このベッドで夜中にオナニーしてたんだね、千帆子さん？」
「そ、そうよ！ここで、はうぅっ！じ、自分を慰めていたのよ！」
「指でしたの？それともバイブみたいな道具を使ったの？」
俺が腰を振りながら質問すると彼女は恥ずかしがりながら正直に答えてくれた。
「バ、バイブも使ったわ！」
「俺達がセックスしてる時も興奮してオナニーしたの？」
「あぁんっ！え、ええ！お風呂でもいやらしい声を出してパンパンしてたでしょ！
あ、あんな音を聞かされたら仕方ないじゃない！
一人で寂しくシたわよ！あぅぅっ！」

千帆子さんは若干怒ったが俺のチンポで突かれてすぐに甘い悲鳴を上げた。
「千帆子さんもお風呂でオナニーしたんだ？どうやったの？」
「ど、どうって・・・ひゃんっ！シャ、シャワーヘッドを押し付けたり、バスタブに・・・んぅぅっ！あそこを擦り付けたのよ！」
俺達がセックスしてる隣で千帆子さんは声を抑えてオナニーしていた。
俺はその光景を想像してゾクゾクした。

「もうオナニーなんてしなくていいよ！ほら！俺のチンポを貸してあげるから！」
「あうっ！やんっ！あふうううっ！」
俺が彼女の膣内をかき回すようにチンポを動かすと彼女は激しく喘いだ。
俺は千帆子さんのたわわな胸をいじりながら一番奥までチンポを押し付け、
許可もなく射精した。びゅるるるるうううっと激しいザーメンの放出が始まり、
千帆子さんが悲鳴を上げる。
「きゃあああっ！な、中に出てるぅッ！」
「ああ！中に射精してるよ！」
俺は悪びれもせず千帆子さんの子宮を精液で満たす。

「ら、らめぇっ！妊娠しちゃうぅぅっ！」
彼女はそう言うがオマンコはしっかり締め付けてくるし、
本当に嫌なら生で挿入なんてさせないはずだ。
しかも彼女はアヘ顔になってよだれを垂らしている。とんでもない淫乱妻だ。

「まあ、千帆子さんもあなたとエッチしたかったのね？」
振り返ると志桜里さんが立っていた。
部屋の鍵は閉めてなかったから勝手に入ったのだろう。
彼女も俺たちのセックスを壁越しに聞いてたらしく、
唇が濡れて頬が火照り、目には淫らな光が妖しく灯っていた。

「し、志桜里さん・・・見ないでぇ・・・」
同性の女に痴態を見られるのが恥ずかしいのか
千帆子さんはおっぱいと股間を手で隠そうとした。
でも俺は彼女の手を押さえて恥部を志桜里さんに見せつけてやる。

「見てよ、志桜里さん。千帆子さんのおっぱいとオマンコ、
すごく感度が良くて気持ちいいんだよ。潮まで噴いちゃうし」
「や、やめてぇ・・・意地悪なこと言わないでぇ・・・」

千帆子さんは羞恥心から顔を赤くし、いやいやと首を振る。
それを見た志桜里さんは片手で自分の乳房を揉みしだき、
もう片方の手は股間を押さえてハアハアと荒い息をした。
「そんなエッチな姿を見たら我慢できないわ。私も混ぜてくれる？」
「ああ、いいよ。志桜里さんもこっちに来るんだ」
「ま、待っひぇ・・・志桜里さんと一緒なんて・・・」
千帆子さんは羞恥心から抵抗しようとしたが、俺がおっぱいを揉むと
すぐに何もできなくなり、俺は人妻たちとの3Pを開始した。

「ぺろっ、れろっれろれろぉぉっ。あはぁんっ、チンポ美味しいわぁ。夕食の後にしゃぶるオチンポ、たまんなぁい」
志桜里さんは舌を伸ばして俺の亀頭を舐めながら言った。
「じゅるっ、れろっれろっ、べろぉぉぉっ。早くオチンポミルク出してぇ。デザートのオチンポミルク、飲みたくてたまらないの」
千帆子さんはチンポの裏スジを丹念に舐めながら言う。
2人は豊満すぎる乳房を互いに押し付けて動かし、その乳肉の隙間から俺のチンポが巨塔のように聳え立っていた。
2人は俺と一緒に夕食をとった後、パイズリフェラをしてくれたのだ。
1人ずつしてくれたことはあったが2人同時は初めてだった。

「志桜里さんも千帆子さんも気持ちいいよ」
俺は嬉しそうにチンポをしゃぶる2人を見下ろし、王様になった気分で言った。
「最高の乳マンコと口マンコだ」
「やんっ、乳マンコだなんて・・・」
千帆子さんはチンポを挟む自分の大きな胸を見下ろし、少し照れた。
彼女の感じやすい胸は俺と志桜里さんに擦られて乳首がビンビンに勃起してる。
「うふふ、いいじゃない」
志桜里さんは我慢汁まみれの唇をぺろっと舐めて笑みになる。
彼女の乳首は千帆子さんよりも小さいがツンと蕾のように尖っていた。
「私達の口もおっぱいも彼のチンポをシゴくためにあるんだから。
恥ずかしいならやめていいのよ?私だけがチンポミルクを飲むから。あ〜んっ」

志桜里さんは口の中に俺のチンポを迎え入れ、首を上下させながら激しいフェラを始めた。

「ん、ふっ、じゅぷっ、じゅぷぷっ、じゅるるっ、れろれろれろぉぉぉぉんっ」

「ううっ！す、すごいよ、志桜里さん！」

巧みな舌遣いとすぼまった唇の動きで俺の射精感が高まる。

それを見た千帆子さんは慌てて言った。

「独り占めなんて駄目ぇ！わ、わかったわ！

私の口もおっぱいも彼専用のマンコよ！

マンコだから！乳マンコと口マンコでチンポにご奉仕させてぇ！」

千帆子さんの懇願を聞いた彼女はにやりと笑って口を離した。

「うふふ、さあ、どうぞ」
我慢汁と唾液で糸を引く俺のチンポを譲り、今度は千帆子さんの番だ。
「あむっ、べろっ、べろべろっ、ちゅぷっ、じゅるるるっ・・・」
千帆子さんの口内にチンポの先端が入ってゆき、
ぬるぬるの舌がカリの部分を舐めた。
「いいよ、千帆子さん。俺のチンポ美味しいかい？」
「れろろっ、じゅれろろっ・・・んふっ、ちんほ、おいひぃ・・・」
「まあ、千帆子さんったら嬉しそうにしゃぶって。私にもちょうだぁい」

志桜里さんも気が高ぶり、俺のチンポにしゃぶり付いた。
2人は奪い合うように舌を絡ませて鈴口やカリ、裏筋を舐め回してゆく。
同時に2人の乳房もうねって陰茎を刺激するのだから俺はたちまち限界を迎えた。
「う、ううっ！2人とも！イクよ！」
風船のように膨張したチンポの先で2人が大きく口を開け、
直後に猛烈な勢いで大量のザーメンがほとばしった。
どびゅうううっ、どびゅっ、どびゅるるっ、びゅくくくくっ。
チンポが跳ねながら粘っこい白濁液が噴き出し、
2人の顔と胸をドロドロに汚してゆく。
「べろっ、じゅるるるっ。あぁんっ！あ、あなたのザーメン、すごい勢いだわっ！」
「べろろっ、じゅれろっ。に、匂いもすごい！ザーメンで溺れちゃうぅぅっ！」
2人の顔と胸はクリームでパックしたようにベトベトになり、
俺は他人の妻たちを俺の色で染め直したという征服感で満たされた。

「あふゅんっ！ら、らめぇぇっ・・・」
「うふふ、大きな声を出すとばれちゃうわよ、千帆子さん」
志桜里さんが彼女に微笑みながら言う。
なにしろここはベランダで志保子さんは全裸なのだ。
しかも志桜里さんも全裸で二人は尻を並べていた。
俺は志桜里さんと志保子さんのオマンコを交互に突きまくり、
パンパンと音を鳴らして屋外セックスに没頭していた。
2人ともスリルのあるベランダでの行為に興奮しており、
俺が腰を振るたびにおっぱいと尻を揺らして喘ぐ。
今は志桜里さんにチンポを挿入し、千世子さんには指を突き入れて
2人仲良く愛液を垂れ流していた。
「そうだよ、千帆子さん。2人の裸は俺だけが見ていいんだ。
他の男に俺達のセックスを見られてもいいの？」
俺は彼女のオマンコの中を指でかき回しながら聞いた。

「んひいいっ！な、中で指チンポぐるぐるしちゃらめぇっ！」
俺の愛撫が激しすぎたのか千世子さんの足はガクガク震えた。
こんなに大きな声を出していたら近所に気づかれるのは時間の問題だろう。
だが、それもいいかと思いながら俺が千帆子さんのオマンコを楽しんでいると
俺のチンポを挿入された志桜里さんが腰を揺すってピストンをねだった。
「んもう、千帆子さんばかりいじらないで。私のオマンコもほじってぇ」
「おっと。ごめんね、志桜里さん。ちゃんとオマンコをほじるよ。ほらっ！」
「あぁんっ！！」
俺が腰を激しく動かすと志桜里さんのオマンコがヒクヒク痙攣した。
俺の精液を搾り取りたくて仕方ないみたいだ。

「いいわっ！チンポ、いいッ！ベランダで極太チンポに突かれて
オマンコ喜んじゃうッ！もっと擦って！マンコの奥に思い切りザーメン出して！」
「し、志桜里さんの次は私よ？指チンポもいいけど、あぅっ！
ほ、本物のチンポが一番いいのッ！チンポ欲しいっ！欲しいのぉっ！」
ベランダで俺のチンポをねだる2人の人妻。
俺は彼女たちの期待に応えて思い切り腰を振り、2人が立てなくなるまで
ピストン責めと膣内射精を繰り返した。

あれから数日が経ち、俺達の背徳的な関係は順調に続いている。
そして2人はついに俺の子を身籠りたいと宣言した。
「はううっ！も、もっと突いて！あなたの赤ちゃんを孕ませてぇ！」
志桜里さんが孕ませ請いをしながらオマンコを締めつける。
「私にも出して！今日は危険日だからたっぷり奥に射精してぇ！」
千世子さんもヨダレと愛液を垂らして俺の精液をねだる。
どちらも締め付け具合は最高だ。本気で俺の子を孕もうとしている。

俺は２人の、他人の妻たちの膣穴を限界まで硬くなったチンポで蹂躙し、
孕ませる気満々の濃い精液を放とうとしていた。
ここは志桜里さんの部屋で両隣は俺と千帆子さんが済む部屋だ。
だからいくら大きくて卑猥な声を出しても聞かれる心配はない。
俺は２人のお腹が膨んで母乳を出す姿を想像しながら
種付けピストンし、２人に妊娠するよう叫んだ。
「２人とも孕め！俺の子を妊娠するんだ！」
俺は股間を激しくぶつけて志桜里さんに種付けピストンする。

「は、孕むわッ！だからいっぱいセックスして！ううん！
こ、交尾をしてッッ！あなたの精子で受精させてぇッ！」
志桜里さんはまるで動物のようにセックスを交尾と呼び、
一人の雌として俺の精子を求めた。
「私も受精させて！私のマンコはあなたのものだからッ！あうぅっ！
そ、そのたくましいチンポでマンコをハメて！卵子に精子をぶっかけてぇぇッ！」
千帆子さんも最初の頃が嘘のように淫語を叫び、
淫らな雌と化して俺に種付け射精を急かした。

玄関。リビング。台所。風呂。寝室。
俺はあらゆる場所で2人を脱がし、様々な体位で俺の精液を注いでやった。
2人の家庭に俺と種付けセックスをしなかった場所などない。

「いいぞ、2人とも！俺の子を孕め！孕めええええっ！」
「来てぇ！ドスケベ人妻マンコをあなたのチンポで孕ませてえええッ！」
「私もッ！夫なんてもういい！淫乱な雌をチンポで種付けしてえええッ！」
志桜里さんも千世子さんも卑猥な言葉を使って俺を喜ばせる。
2人が孕むのは時間の問題だ。
俺はそれを待ちわびながら2人の奥に精液を注ぎ込んだ。

「今日もいっぱいかわいがってあげるよ」
「い、痛いわ。もう少しやさしくして。がっつき過ぎよ」
「生意気な口調だ…。少しお仕置きがいるかな…」
「そ、そんな…」

「すごい気持ちいい。今日はとことん突いてあげるよ」
「あ、アン…！は、激しい…っ。い、いつも後ろからしかしてくれない、のね」
「ふふ。正常位がいいかい？でも今日もダメだ。バックで犯してあげる」
「そ、そんな…」